

令和 6 年 5 月 9 日現在

機関番号：34603

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13198

研究課題名（和文）古代中央アジアにおけるフン系集団の研究

研究課題名（英文）Study of the Hunnic groups in Ancient Central Asia

研究代表者

宮本 亮一（Miyamoto, Ryoichi）

奈良大学・文学部・准教授

研究者番号：00867856

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：4世紀以降の中央アジアに展開した、キダラ、エフタル、アルハンなどのフン系集団に関する考察を行った。これまでほとんど使用されてこなかったバクトリア語やソグド語などの中央アジアの現地語資料や、イスラーム時代のアラビア語年代記、さらに貨幣資料の分析から、これらの集団の詳細な歴史的展開、とりわけ中央アジアから南アジアへ向かう動きを明らかにすることができた。また、これらの集団の内部構造や支配形態についても、今後の研究にむけた土台を形成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フン系集団が展開した時代は、中央アジアを經由してユーラシア各地の文化が東西南北に伝播した。文献資料を利用した研究で得られた歴史像は、考古、宗教、美術などの隣接分野の研究の土台ともなる貴重な成果といえる。ヨーロッパ方面に展開したフン族の存在は、歴史教科書に記述されるほど有名であるが、同じルーツを持つ中央アジアのフン系集団については、ほとんど知名度がない。本研究の成果は、これらの集団に対する一般的認知を進展させ、次世代の研究者が誕生する土台を形成するものともいえる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the development of Kidarites, Hephtalites, Arkhan, and other Hunnic groups in Central Asia from the 4th century onward. Through the analysis of local languages of Central Asia such as Bactrian and Sogdian and Arabic chronicles of the Islamic period, which have rarely been used for this study, and numismatic sources, we have been able to clarify the detailed historical development of these groups, especially their movement from Central Asia to South Asia. The study has also provided a foundation for future research on the internal structure of these groups and their forms of rule.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：フン系集団 キダラ エフタル アルハン バクトリア語文書 アラビア語年代記 トハーリスタン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

いくつかの文献資料から、5世紀初頭～後半まではキダーラ、5世紀後半～6世紀後半まではエフタルと呼ばれる遊牧集団が、トハリスターン(現在のウズベキスタン南部、タジキスタン南部、アフガニスタン北部にあたる地域)に本拠地を定め、中央アジアの広範囲を支配したことが知られていた。そして、これらの集団はインド方面へも勢力を展開させた。

両集団については、その勃興年代や民族系統に関わる議論が盛んに行われた一方(榎一雄「キダーラ王朝の年代について」『東洋学報』41/3, 1959; 榎「エフタル民族の人種論について」『東方学』29, 1965 など)、具体的な動向に関しては、内藤みどりの研究(「エフタル民族とその発展」『東西文化交流史』, 1975)以外にほぼ存在しなかった。

しかしその後、桑山正進が、現地調査で得られた地理的理解に基づき漢文資料を詳細に再検討することで、両集団が中央アジアからインド方面へ移動した具体的な経路を明らかにした(『カーピシー・ガンダーラ史研究』1990)。また近年、文献と考古資料を分析した Étienne de la Vaissière は、中央アジアのキダーラとエフタル、そして5世紀前半から東欧に侵入し、民族大移動を引き起こしたいわゆる「フン族」が共に、4世紀中頃にアルタイ山脈付近に存在した匈奴の残存勢力にルーツを持つことを明らかにした(“Huns et Xiongnu”, *Central Asiatic Journal*, 2005)。

こうした研究に加え、貨幣学的研究もある程度進展しているものの、これらの集団の中央アジア到来以後の詳細な歴史的展開や、支配のあり方などはほとんど明らかになっていなかった。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、これまで当該分野の研究で用いられてこなかった、アラビア語年代記や中央アジアの現地語資料を活用することで、中央アジアに展開したフン系集団に関する理解を深化させることにある。

フン系集団と対峙したサーサーン朝に関する豊富な記述を含むアラビア語年代記は、イスラーム時代以前の研究にも十分有用であり、バクトリア語やソグド語などの中央アジアの現地語資料も、フン系集団による統治のあり方を明らかにする上で、非常に重要な資料である。また、本研究では、貨幣学の成果を積極的に利用することもその特徴の1つである。一般的に、貨幣学者は文献の内容を十分に考慮に入れず、文献学者は貨幣学の成果を低く評価する嫌いがあるが、本研究では、文献と貨幣の対応関係を詳細に検証することを目指した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、以下の方法で研究を進めた。

A サーサーン朝によるフン系集団への対応を明らかにする

サーサーン朝史の再検討を行うため、ディーナワリー(895 頃没)著『長き物語の書(*Kitāb al-Akhbār al-Ṭiwāl*)』および無名著者『ペルシアとアラブの歴史における究極の目的(*Nihāyat al-Arab fī Ta'rīkh al-Furs wa al-'Arab*)』における王朝史の部分を解読した。これらの文献を用いた理由は、他のアラビア語年代記に見られない詳細な王朝史が記されていると指摘され

ているにも関わらず(黒柳恒男「アラビア史料覚え書き」『アジア・アフリカ評論』7, 1957), 未だどの言語にも翻訳されていないからである。

また, 上記の年代記から得られた情報を, ヤアクービー『歴史』, タバリー『諸使徒と諸王の歴史』, マスウーディー『黄金の牧場と宝石鉱山』などに見える王朝史と比較検討する試みも行った。この作業を通じて, 王朝の諸王がフン系集団に対してとった行動を詳細に分析し, 西側の視点からフン系集団の詳細な動向を探った。なお, 王朝史の理解には, 印章を用いた, 行政組織構造に関する Rika Gyselen の一連の研究成果 (*La géographie administrative de l'empire sassanide*, 2019 など) を援用した。

B フン系集団による支配のあり方を探る

トハースターンの現地語であるバクトリア語の世俗文書を, フン系集団による支配のあり方に着目して分析した。文書には, フン系集団の1つであるエフタルが, トハースターンで「税」を徴収していたことが記されていた。この情報だけではエフタルによる支配の実態は浮かび上がらないが, 前後の時代の文書に現れる「税」の用例を網羅的に検証し, エフタル時代と比較することで, エフタルによる支配が在地社会にどれほどの影響力を与えたのかを考察した。また, こうしたバクトリア語文書の分析を通じて, バクトリア語という言語そのものに対する理解の深化をも目指した。

C フン系集団の内部構造を明らかにする

近年の貨幣学の成果を整理し, 貨幣に刻まれた発行場所の地域名や一括埋納貨幣の発見場所から, キダーラ, エフタル, そしてアルハン(貨幣のみから知られる集団)の発行した貨幣の地理的分布を確認した。その上で, 上述のアラビア語年代記のほか, 漢語, アルメニア語, ギリシア語, ラテン語, シリア語文献などに見える, フン系集団が展開した地理的範囲を網羅的に分析し, それらと貨幣の地理的分布との対応関係を調査した。

4. 研究成果

文献資料の分析を通じ, 4世紀以降の中央アジアに展開したキダーラ, エフタル, アルハンなどのフン系集団の詳細な歴史的展開, とりわけ中央アジアから南アジアへ向かう動きを明らかにすることができた。より古い時代のクシャーン朝, あるいは, 後世のイスラーム時代の諸王朝(ガズナ朝, ゴール朝など)と同様, フン系集団の一部も, 徐々に南アジアに進出し, インド文化との接触を持っていた。ただし, アラビア語文献の分析に関しては, 研究者自身の読解能力の不足から, 当初予定していたほど網羅的に実施することができなかった。今後の研究課題としたい。

また, 貨幣と文献の総合的な分析を通じて, 文献に単一の勢力として記録された集団の内部に, 複数の集団が並存していた可能性を提示することができた。もし, このような状況が正しいとすれば, 匈奴や突厥, さらにはイスラーム時代のカラ・ハン朝など, 勢力が東西や南北に分裂した集団の構造との比較も可能となってくるだろう。

さらに, バクトリア語文書の分析の副産物として, 言語そのものやトハースターンの宗教事情に関する理解に関しても, 若干の成果をあげることができた。

なお, コロナウイルスの蔓延があり, 当初予定していた海外調査を全て行うことができなかった。それでも, 機会を見つけてヨーロッパの研究会等に参加し, 最新の研究状況に関する情報収集を行うなど, 今後の研究につながる活動を実施できたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮本亮一	4. 巻 46/4
2. 論文標題 言語の名前と地域名	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 20-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本亮一	4. 巻 92
2. 論文標題 カダグスターンからの手紙	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 49-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/seinan-asia-kenkyu_92_49	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本亮一	4. 巻 59
2. 論文標題 ワフシュ神とラームセート神：バクトリア語文書から見たトハーリストーンにおける宗教事情の一側面	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋学研究	6. 最初と最後の頁 85-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ryoichi Miyamoto	4. 巻 31
2. 論文標題 Letters from Kadagstan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Bulletin of the Asia Institute	6. 最初と最後の頁 87-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール(宮本亮一 訳)	4. 巻 22
2. 論文標題 玄奘の旅程に関する覚書	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告集	6. 最初と最後の頁 243-249
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 宮本亮一
2. 発表標題 バクトリア語資料と中央アジア史
3. 学会等名 前近代内陸アジアとその隣接地域の社会と文化
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本亮一
2. 発表標題 アフガニスタン周辺のコイン
3. 学会等名 シルクロード学研究会2022冬(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本亮一
2. 発表標題 6-8世紀のヒンドゥークシュ山脈南北の歴史
3. 学会等名 科研「パーミヤーン壁画の描き起こし図の作成とその美術史的研究」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ryoichi Miyamoto
2. 発表標題 Notes on the Bactrian contracts mentioning God Wakhsh and God Ramset
3. 学会等名 10th European Conference of Iranian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryoichi Miyamoto
2. 発表標題 Historical study on the Bactrian documents: an example
3. 学会等名 Politics and Archaeological Missions in Afghanistan: Japanese and International Research on Afghanistan and Iranian Plateau (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 宮本亮一
2. 発表標題 前イスラーム時代における中央アジアから南アジアへの人間集団の移動
3. 学会等名 奈良歴史研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 青山亨ほか(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 770
3. 書名 アジア人物史 第1巻 神話世界と古代帝国	

1. 著者名 東洋哲学研究所（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東洋哲学研究所	5. 総ページ数 495
3. 書名 シルクロード研究論集1 仏教東漸の道 インド・中央アジア篇	

1. 著者名 前田耕作・山内和也（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 アフガニスタンを知るための70章	

1. 著者名 宮治昭・福山泰子（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 635
3. 書名 アジア仏教美術論集（南アジア1）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------